

「多関節に活動性を有する若年性特発性関節炎におけるトシリズマブ導入時の炎症抑制に関する検討」の公表について

感染免疫科では、小児リウマチ性疾患をもつ多くの患者様を診療させていただいている経験を基に、国内における診断や治療に関する問題点など様々な情報を発信しています。

少関節型および多関節型で発症した多関節に活動性を有する若年性特発性関節炎は多くの症例が免疫抑制薬メトトレキサートにより治療されますが、メトトレキサートの効果が不十分もしくは不耐の場合には生物学的製剤の投与が必要となります。日本ではTNF- α 阻害薬による治療に先立ち抗インターロイキン6レセプター抗体であるトシリズマブが承認され、JIA治療に用いられています。生物学的治療が行えるように成り、多くのJIAをもつお子さん達が関節炎を抑えこむことが可能となりましたが、一部の症例ではTCZ点滴投与の開始によっても関節炎の抑制が困難なお子さんがいらっしゃいます。

当センターでは、こうした患者さんの特徴を見いだすべく、診療録を参考に、炎症が抑えられたお子さんと抑えられなかったお子さんの臨床情報に関して、比較検討を行いたいと考えています。皆様の診療に役立つ情報が得られた際には、その後に論文での公表を行わせて頂きたいと、お知らせいたします。

今回の検討の対象となる患者さんは、トシリズマブが国内で適応を取得した2008年8月から2014年5月までの間に新たにトシリズマブを導入した患者さんで、少関節型または多関節型で発症した22名のJIAのお子さんです。

本研究には、個人を特定できるような情報の開示は含まれていませんが、調査対象に該当する患者様を含め、公表内容についてお問い合わせの際には以下までご連絡をお願いいたします。

あいち小児保健医療総合センター 感染免疫科
研究責任者 感染・免疫科 岩田直美
TEL : 0562-43-0500 (代表)